

あの原発事故から10年

(株) PPQC 研究所代表取締役会長 / 獣医師・農学博士
加藤 宏光

地震だ!!

その時、私はラボの自室で、新聞のスクラップをしていた。突然、携帯電話が今まで聞いたこともない異様な音を立てて騒いだ。

「何事?!!」

と携帯電話の画面を覗いた。「地震警報」の文字を読み取ったその時、これまでにない《揺れ》が始まったのである。

私が福島県の地に来たのは、今を遡ることおよそ44年前の6月。引越越し作業を済ませて、新しい場所の散策に家族して郡山市の街中へ出かけ、当時あった西武デパートへ入った、まさにその時、マグニチュード7.4の仙台沖地震が起きた。

関西での生活しかなかった私たちにとっては、それこそ初めての大地震。それから30年ほどの間にかなり大きな地震を経験し、随分揺れに慣れていると思っていた私にとっても『これは違う!!』と思わせるに余る大揺れ。眼下に並ぶ(私の部屋は2階に位置している)スタッフたちの自動車、ボンボンとジャンプしているのである。

「縦揺れのせいかな!!」

私を除く男性のすべてが、それぞれ農場巡回に出かけ、研究所に居たのは女性のみ15人ほど、その全員が駐車場に飛び出し怖れ隠れている。

その地震は、中休みを挟んで2分余り激しく揺れ続いた。この間、私は自室から望める安達太良山の頂きを見ながら『これで安達太良山が噴火したら終わりだな!!』と呟っていた(注1)。

地震直後

当日は金曜日、いつもは東京へ戻る日になっていたが、高速道路は閉鎖されている。正直言って研究所に何の影響もなく、ラボから郡山までの道でもこれといったダメージを感じさせられることもなかった私は、郡山の自宅に帰って居間に入った時、改めて驚いた。

大型テレビをはじめ、2階では家具の一部が転倒しているのである。それでもひっくり返った家具を戻せば、元に戻る。

本当に仰天したのは《テレビ》を付けた時であった。いきなり目に

名が、慄いた表情で現れた。自宅にいとより不安になるから、とのことであった。

『とにかく、飯でも食べよう!!』
落ち着くには腹に何か入れるがよい、と思った私は、出てきたメンバーに話しかけ、石油ストーブの上で鍋を置き、持参したコメで飯を炊き始めた。その日はラボのある二本松市では、さすがに停電していたのであった。

人を率いるためには、迷わぬこと、落ち着くこと、さらには進むべき道を明確にすること、そう信じる私は先ずは腹を満たすことで、皆を落ち着かせようと考えたのである。

いずれにしても、当日できることはない、ただ、超低温冷凍庫に保管してあるさまざまな病原体サンプルは、停電が続けばすべてゴミとな



加藤宏光PPQC研究所会長

入ったのは、仙台を襲っている大津波の像であった。

『これは天変地異だ!!』
それが私の印象。私の周りでは、大きな被害がなかったが、それこそ《天運》に恵まれていたことは後になって知る。

その翌日、土曜日にラボへ出る道すがら、『水の予備を...』とコンビニに立ち寄ったが、ペットボトルの水をはじめ、お茶の類から食料品もほとんどが売り切れ。食品の棚は空っぽである。

『それなら、水は?!!』

る。そこで、大事なサンプルは1つの超低温冷凍庫に集め、ドライアイスで封入して保管を図った。これで2~3日は大丈夫のはず。

先の留学生を、停電し、しかも異様な雰囲気の中で1人では置けない。午後5時を回る頃、彼を伴い郡山へと向かった。途中、たまたま営業しているラーメン屋を見かけ、夕食を摂った。

その時、白い防護服(使い捨てのつなぎ服)を着た数名が街角で何かをしている。防護服は私たちも農場の巡回で普通に使う。「妙だな!」と一瞬思ったものの、見過ごして郡山の自宅へ帰着。その後はテレビの画面に繰り返し流される《津波》の惨状と、テロップで示される無数とも思える死亡者の名前などを唯々見つめるのみであった。翌日もラボへ出かけ、停電が回復するか、何事も起きないかを確認していた。

原発の爆発

そして、月曜日。朝一番に全員集合である。1人のスタッフ宅は地震で半壊とのこと、それ以外には大きなダメージを受けた者はいない。私



東日本大震災発生を示した時計(無菌室設置)



当時の雑誌で取り上げられた原発事故関連記事

と冷凍保存庫を見ると、氷は手付かず...
『溶かせば水なのに!』
1キログラムの角氷を5個といくばくか残っていた菓子類を買う。
『この分なら、ある程度の水を確保する必要があるかもしれない』
そう思った私は、ラボへの20キロメートル余の道々コンビニを見つけては角氷5個余りずつ買い足しなが

ら急いだ。
幸いにもラボには大きな被害・影響がない。当時ラボに寄宿していた、フイリピン大学からの留学生が何とも言えない表情で出迎えてくれた。2階の自室では、書棚にある書籍・書類が1冊も落下していない。昨日の郡山の住居の乱れ方が嘘のようである。

午後になると、女性スタッフの数



事故原発からPPQCまでの距離



事故原発周辺地図

も、稲藁がセシウムに汚染されていることが判明し、しかもこの藁は原発から70キロメートル以上も離れた白河市から購入したものであった。今朝（2011年7月23日）の8時30分からのNHK報道番組「週刊ニュース深読み」で《放射性セシウム汚染和牛問題》が取り上げられていた。この問題の要点をまとめると、食肉のセシウム汚染規制値は安全性を加味して極めて低く設定されていた。

（0.0016ミリシーベルト）。牛の場合、1万ベクレルの汚染飼料を摂取しても、1000ベクレルしか肉へ移行しない（濃縮はないという）さらに人がそれを喫食した場合の人の被曝は（この段階はミリシーベルトで表現するという）、0.008ミリシーベルトで規制値の1ミリシーベルトと対比して危険度が低いことは明らか。人間が摂取した放射性セシウムは幼児（3〜9歳くらい）では9日間、50歳では90日間で半減する。つまり

- 安心は別問題
- 安心のための3つの要件
- 十分なる情報の開示
- 開示する側の信頼性
- 迅速な対応（記憶は明瞭でない...）
- その時点で国が決めている対策は
- 福島県の和牛の出荷停止
- 福島県産牛肉の全頭検査
- 宮城、岩手、山形、新潟、栃木等の県産の牛肉に対しては全農家で出荷する最初の牛に関しては放射性セシウム量を測り、それが規定値以下

であれば以降は良と判断し検査しない。この時、牛肉相場は激落し、西日本のマーケットにおいてですら通常1500円程度のパックが280円で投げ売りされていたという（NHK）。これほどの価格下落は業界の崩壊をイメージさせるものであり、行政はもつともと深刻に事態を受け止めてきめ細かい対策を講じるべきである。しかし、公的検査機関の能力限界を遥かに超えた検査材料数であるため、民間の協力検査が必要とされていた。ちなみに、これらの価格被害（売れなくなったことに対



日経の放射線記事



放射線の影響に関するサイエンス記事

は全員に対して次のような注意を与えた。
● 当面は、農場巡回はできない
● ガソリンの給油は難しいであろう。ゆえに、各自の車にあるガソリンを有効に使用すること
● 食料品の入手も難しい。食料確保が必要である場合、当番制で朝一番にスーパーへ行き、必要な食糧を入

手すること。そのための情報（何をどれだけ購入するか）は前日にまとめ、当番に依頼すること
● これから2週間は原則内勤で、それまで滞留していた業務を整理・実施すること
● 何か不測の事態が起きれば、その都度指示を出すこと
こうしたコメントを与えて、自室

でこの地震を与えた激甚な被害状況を調べていたところ、スタッフの1人が
『どうも浜通りの原発が爆発したら、その情報でひどく動揺し、避難しようとする者がいる』
と知らせてきた。とりあえず再度全員を集め、動揺を抑える話をした後で、インターネットで調べると、

主に10万羽規模の採卵鶏を経営する生産者がおられた。のちにこの方の避難の様子がわかった。
『突然、町の広報で《直ちに町の手配をした車に乗るよう》指示をされた。その時には《避難する》とは告げられず、そのまま避難所へ直行。銀行通帳や貴重品すべてが置き去りで、とにかく着の身着のままであった。何が何だか分からない状況下のやみくもな避難で、それが原発事故のための行動であることすら十分に理解していなかった』
この話から、原発事故と避難がいかに急な決断であったのかが分かるような気がする。

放射性セシウム汚染の影響

3月14日には福島原発が水素爆発した。当初半径3キロメートルエリアに避難指示が下されたが、間を置かず10キロメートルに拡大された。10〜20キロメートル範囲は避難勧告エリアに、20〜30キロメートルは屋内待避エリアとされた。大熊町に、私どものクライアントで直販を

事件が少し落ち着きを見せはじめたところ、南相馬産の牛肉を東京都が独自に検査し、放射性セシウム汚染を明らかにした。これを嚆矢として食の安全に関する不安が大きく取り上げられた。汚染ルートが春先まで野積みされていた稲藁を出荷前の牛に与えたことである、と判明。次いで県南に位置する浅川町において

2019年12月発売の最新刊

米国ベストセラー HACCP 完全解説書 全疑問・誤解はこの1冊で解決

HACCP その食品安全の 系統的アプローチ

編者：ジェフリー・T・バラク (Ph.D.)
メリンダ・M・ヘイマン (Ph.D.)
翻訳：一般社団法人 HACCP トレーニングセンター
編集：月刊 HACCP

A4判 240頁
定価 8,700円 (税別)

食品製造業者協会 (GMA) は、米国食品業界に対し食品安全規制の遵守と実施を支援し、これまで食品業界で使用されるカリキュラムや教材を提供してきた。本書は、「HACCP-食品安全への体系的アプローチ：ハザード分析および必須管理点 (CCP) 計画の作成と実施のための包括的なマニュアル」の最新版(第5版)で、現行適正製造規範 (cGMP) および HACCP の内容をまとめ、さらに新たな業界のプログラムと規範を盛り込み刷新した。

2011年1月4日に制定された「食品安全強化法」(Food Safety Modernization Act : FSMA) における「予防コントロール規則」は、CCP 以外のコントロールを含み、前提条件プログラム (PRP) と呼ばれているものの多くが予防コントロールの対象となり HACCP とは若干異なる。しかし、その基本は「ハザード分析」であり、CCP で管理されるプロセスコントロールのほか、ハザードと紐づけされるサンテーション、アレルゲン交差接触、サプライチェーン・プログラムも「予防コントロール」として必須なステップを特定し管理していく。本書はこれらの解説も含めた、最新の食品安全管理のバイブルである。

ご注文は鶏卵肉情報センターまで
FAX・お電話にてご連絡ください。

発行・販売：(株)鶏卵肉情報センター FAX052-883-3572 TEL052-883-3570

好評
発売中

HACCP その食品安全の系統的アプローチ

A4判 240ページ
定価 8,700円(税別) 送料別途

◆お名前

◆ご所属

◆ご住所

◆TEL

◆FAX

◆冊数



HACCPは進化するシステムである。

本書は米国で使用されるHACCPの最新テキストである。米国ではHACCPを超える概念である予防コントロールが規制として本格導入が進んでおり、米国でのHACCPのテキストとしてはこの版が集大成ともいえる。本書が、日本国内での引き続き混乱に終止符を打ち、食品事業者にとって真に役立つ食品安全の見える化手法としての、食品サプライチェーンにおける一貫した取り組みを実現するための一助となることを願う。
監訳者：月刊HACCP 杉浦嘉彦 (談)

システムに則っている(注2)。
当時、生産を維持していた方々は、その県外を含める流通先(県内外)から県内限定とせざるを得なかった。

現在では放射能汚染そのものによる販路の障害は耳にしないが、当時失われた市場を十分に回復しているとは言えないのが現状であり、一度失った市場を取り戻すことは難しい。私は次のように説明している。
『ゼロサム化した市場からの撤退は、風呂の水を手で掻き寄せるようなものである。掻いた後に溝ができるのは一瞬。そこへは新たに周囲から水が押し寄せ、溝はアツという間に埋められる』

10年経った今、低レベル放射能汚染水の海への放出問題が大きく取り上げられている。浜通りで漁業を営む漁師たちが『再びの風評被害』を危惧するのは当然である。風評は行政ではコントロールできはしない。補償をもって補うといっても、それは根本問題の解決ではあり得ない。
現在も生産品に対する『放射能検査陰性証明書』を発行する業務が(随分減ったとはいえ)私どもの研究所に残っているのも事実である。これ

こそ、現存する『風評被害の残滓』といえよう。

風評被害への生産者の姿勢

10年前の事件以来数年にわたり『福島県産』というだけで神経質な消費者から忌避されていた。5年ほど前のこと、出入りの植木屋の談。

『さつき、剪定したお宅でリンゴが《箱のまま開封せずに》捨てられていました。どうしてですか?と聞いたところ、福島産だから...との答え。もったいないので、私がいただいてきました』

この逸話は聞く者にとって苦しい。こうした過度に敏感な消費者がいくばくかはいるものである。
別のリンゴ農家との話。

『確かに福島産というだけで毛嫌いな方々はいます。しかし、それらの人々は市場全体の20%未満です。残りの80%以上は、安全性を担保していれば何の躊躇いもなく買って下さいます。私は後者の方々を大事なお客様として、自分の生産品を自信を持って売って生活しています』
この言葉には、大いに元氣付けら

れる。

風評被害に対する妙薬はあるまい。ただ時が解決するのを待ち続けるのは、いかにも苦しい。生存のための補償は必然である。しかし、それは必要条件であり十分条件ではない。十分条件の獲得を自律性に任せるといふ行政の在り方には、今起きている『コロナ問題』でも同様に、疑問を感じざるを得ない。

付記

一昨日(2月13日)の夜、異様な揺れで地震が始まった。私は、地震の折には反射的に秒数を数える。『初期微動の秒数に13を乗じると震源地までの距離が分かる』と中学校の理科で習って以来の習慣である。この地震は80秒余り。初期微動は15〜20秒ほどであった。

『ならば震源地は東京から200キロメートルほど、福島〜宮城沖かな?』
そう思った私は、10年前のあの地震を思い起こした。ニュースでは津波は起きないとのこと。震度は6強〜6弱。それなら、前回ほどの被害はあるまい、とは素人判断。

翌日、福島県内のクライアアントに電話し、安否を確認。軽微な被害以外にないとの情報にホッとした次第である。

極大地震の余震は30年間起きる、とはインターネットの情報である。10年ではまだまだ安心できるほどの歴史ではないことになる。地球規模の歴史には、人間はまったく無力であることを実感した。

(注1)

安達太良山は活火山で、170年おきに噴火してきている、と言われる。最後の噴火から170年を過ぎているため、いつ噴火しても不思議ではない。

(注2)

放射能検査・放射性物質の検査は当研究所(PPQC)で実施し、証明書を発行するとともに、自社および福島県養鶏協会のホームページで情報開示している。これは、10年前に発足し現在も継続しているモニタリングである。